

編集後記

今回の特集は自治医大泌尿器科の米瀬泰行氏の労に負うところが多かった。編集部の手違いから執筆いただいた方が多くなり過ぎ、その力作を他号へ廻していただく由承知していただいた。神経因性膀胱に関する研究の最近の進歩はめざましく、その概観を戸塚・米瀬の両氏が解説した。尿流動態検査法は其中でも画期的なものであるとして説明された。脊髄損傷による神経因性膀胱の診断と治療の変遷について白岩・山口両氏が urodynamic study を基に発展しつつある進歩について述べた。神経因性膀胱の治療のいろいろな方法が清家氏らにより述べられ、内科的外科的治療が簡潔に解説された。寺島氏による小児膀胱機能の論文は小児の反射性膀胱、無抑制膀胱の時期を経て正常成人のそれへと発達する過程の説明で興味深いものであった。排便の生理に関する研究はあまり熱心に行われておらず執筆をしていただける方が居ないのではないかという編集子の心配もあったが、岡田論文は大腸の神経支配や運動からはじまって排便反射、肛門管直腸反射、括約筋弛緩反射など論理的にまた理解しやすく解説されたので、読者に利するところ大である。

日常生活に密接しているものであり、また脊髄や脳障害で常に膀胱直腸障害として

一緒にとり上げられて居ながら、排尿関係より研究が今一つ十分ではないと一般には思われがちである。

しかしそのような危惧も本論文は払拭してくれたことになる。

原著では峯尾氏らによる進行性筋ジストロフィー症患者の車椅子上坐位に関する研究は、患者の坐位適合性が良くないという問題点を中心に討議がなされ、また脳卒中患者の車の運転に関する岡本論文は今後急増するであろう社会的ニードの指標の一つとして参考になるものである。脳卒中患者の自宅退院率の低下は重症者（介護常時必要の）に見られ、その対策としての長期療養施設の増加で統計が変化して来たことが中村氏の論文で明らかにされた。

講座は「評価会議」が今回で終り、新たに「社会福祉施設」が始まる。

最後に「ひと」の欄について一言。砂原茂一氏も書いておられるとおり上田敏氏が第24回日本リハビリテーション医学会の会長になったことは、たしかにこの領域の医学における新しい一時期のはじまりと云えることである。彼ほど真剣にリハビリテーション医学に取り組んでおられる方を小生も知らない。大体編集子が同じ編集委員のことを記すということも例がないのであるがあえて附記した。（大井 淑雄）

総合リハビリテーション（第15巻 第6号）

1987年6月10日発行（毎月1回10日発行）

1部定価 1,650円（配送料60円）

（年ぎめ予約購読料 21,560円）
（但し、増大号を含む）
（送料弊社負担）

発行 株式会社 医学書院

代表者 椿 孝雄

〒113-91 東京都文京区本郷5-24-3

電話 受付台 (03) 817-5600

本誌編集室直通 (03) 817-5704

（担当：山田・細田）

販売部直通 (03) 817-5659・5660

ファクシミリ (03) 815-7802

振替口座 東京 7-96693番

印刷所 三報社印刷（株）：電話 (03) 637-0005

広告申込所 （株）東広社：電話 (03) 409-8803

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
河 邨 文一郎
五 味 重 春
砂 原 茂 一
津 山 直 一
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
岩 倉 博 光
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
荻 島 秀 男
奥 川 幸 子
加 倉 井 周 一
小 島 蓉 子
斉 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 橋 勇
高 松 鶴 吉
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
土 肥 豊
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 歓
長 谷 川 恒 雄
初 山 泰 弘
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
米 本 恭 三
渡 辺 英 夫
（五十音順）